



青少年赤十字

JRCふくしま

編集発行

青少年赤十字
福島県指導者協議会
日本赤十字社福島県支部
〒960-1197
福島市永井川字北原田17
TEL024(545)7998

人間を救うのは、人間だ。
Our world. Your move.

一隅を照らす



青少年赤十字福島県指導者協議会

副会長 湯田重哉

(福島県立安積黎明高等学校長)

今年は、全く予想もしていなかった新型コロナウイルスの感染拡大により、不安と混乱の毎日が続いている。青少年赤十字関係の行事も、各地区トレセンや指導者講習会が中止になるなど、大きな影響を受けてしまった。高校関係では、全国高等学校総合文化祭(こうち総文)の現地開催が中止となり、ボランティア部門に出場が決まっていた学校法人松韻学園福島高校と福島成蹊高校の発表もWeb上での原稿掲載のみとなった。両校とも、晴れ舞台で発表する機会、そして全国の仲間と交流する機会が失われてしまったことは大変残念だった

だろう。いつまでこのような状況が続くのか予測できないが、しばらくは感染リスクを考慮しながらの活動を行っていくしかないと考えている。さて、タイトルの「一隅(いちぐう)を照らす」とは、比叡山延暦寺を建立し、天台宗をひらいた最澄の言葉である。一隅とは「片すみ」のことであり、自分の置かれている場所や立場で精一杯力を尽くすことが大切だという意味になる。私は、このような活動が、やがて大きく広がっていき、社会全体を明るくすることができると解釈している。ちなみに、この言葉はアフガニスタンで精力的に活動

し、昨年凶弾に倒れた中村哲医師が好んで使っていたことでも知られている。中村さんは医療活動だけでなく、人々の衛生状態や栄養状態を改善するための用水路建設にも積極的に取り組んだ。当初は懐疑的だった村人も次第に協力的になり、やがて長大な用水路を完成することができたのだ。その結果、荒れ果ていた大地は緑の大地に変わっていき、多くの人々の命を救うことになった。自分が信じた活動を地道にやり続けた中村さんの努力が実り、大きく花開いたということだ。残念ながら、中村さんは志半ばで命を奪われてしまったが、中村さんの意志は国際NGO「ペシャワール会」に引き継がれており、今後も活動は継続されていくだろう。中村さんの活動は青少年赤十字の実践目標である「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」とびつたり一致しており、子ども達にぜひ伝えたいものである。

令和2年度 青少年赤十字福島県指導者協議会役員名簿

役職名	氏名	学 校 名
会 長	糀田 祐子	福島市立福島第一小学校
副会長	高橋 恵子	南相馬市立八沢小学校
副会長	佐藤 秀一	猪苗代町立緑小学校
副会長	湯田 重哉	福島県立安積黎明高等学校
監 事	高原 昇	湯川村立笈川小学校
監 事	旗野 宣久	桑折町立睦合小学校
監 事	郡司 完	福島県立光南高等学校

令和二年度

青少年赤十字福島県指導者協議会

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、様々な活動が制限されているが、むしろこの時期だからこそやらなければならぬこともある。ソーシャルディスタンスが求められ、人と人との物理的距離を保つことが必要になっているが、逆に心の距離は縮めているかなければならない。感染拡大により問題となっている「嫌悪・偏見・差別」をなくすためには、今まで以上に優しさや思いやりの心を高めて

いく活動が必要だ。また、大きな集団での活動が困難でも、一人ひとりができることは何かしら見つかるはずだ。子ども達一人ひとりに考えさせ、行動させることは、青少年赤十字の態度目標である「気づき、考え、実行する」に繋がっていく。コロナ禍の中、子ども達が自ら考えた「一隅を照らす」活動によって、学校や地域が明るく、元気になることを期待している。

五月に予定されていた指導者協議会総会は新型コロナウイルスの影響で中止となり、議事については文書決着となりました。令和二年度の行事についても各地区トレセン、指導者講習会、学校公開の中止などが決定しました。一〇〇文字提案については、締切りを延長して実施することとなりました。コロナに負けない子どもたちの元気な声を届けてほしいと思います。

コロナに負けない 私たちの青少年赤十字活動

日本赤十字社の「コロナウイルスの3つの顔を知ろう」～感染症だけでなく差別や偏見をなくすための教材が教育委員会を通じて配付され、各校で活用されました。

「ウイルスの次にやってくるもの」の指導について

南会津町立松沢小学校 校長 酒井 央

六月から学校再開となり、子どもたちが学校に戻ってきました。今年度の本校の教育活動については、行事や学習内容の精選、七月末までの授業日延長により、第二波がなければ、どの学年も何とか「学び残し」なしの目処が付きました。そんな中、「気づき、考え、実行する」実践としてあいさつ運動やボランティア活動等、子どもたちは今できることに精一杯取り組んでいます。

しかしながら、コロナウイルス感染がなかなか終息しない中、社会では「差別」や「偏見」が問題になっています。罹患者やその家族への誹謗中傷も後を絶ちません。不安感が社会全体に広がり、その雰囲気は子どもたちにも伝わっているようです。

そんな時、日本赤十字社の教材「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう」が配付されました。この教材には次のように記されています。

「この感染症の怖さは、病気が不安を呼び、不安が差別を生み、差別がさらなる病気の拡散につながる事です。この負のスパイラルを断ち切るためには、『衛生行動の徹底』『気づく力・聴く力・自分を支える力を高める』『ねぎらい・敬意』の三つが大切です。」(詳しくは教材で確かめてください。)

全校集会で、この教材を使って、校長講話を行いました。それを受けて、各学級でも話し合いました。子どもたち



ちは、「ほっ」としたり「はっ」としたりしていました。子どもたちなりに何かに気づいたり考えたりしたのでしよう。「差別」や「偏見」はいけないことです。しかし、「なぜ、差別や偏見が起きてしまうのか」「自分はどうか考えるのか」誰にでもある人間の心の弱さも打ち明けながら、友達と話し合ったり考えたりする時間となりました。

感染症への対応は、今後、

子どもたちの力

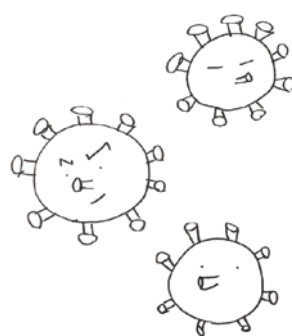
「感謝の気持ちを伝える」

福島市立福島第三小学校 教諭 加藤 千絵

感染症の指定医療機関の一つとなった福島赤十字病院。そして、「県内初の院内感染」という報道により、二次感染者は一人も出なかったにもかかわらず、一部から偏見や差別的な言動を受けた一陽会病院。どちらも学区内にある医療機関です。

六年生児童は、臨時休業中の課題や自主学習で、感染症や新型コロナウイルスについて調べていました。その中で、大変な思いをして働いている医療従事者の方がいることを

長く続きそうです。これからも感染症対策を講じつつ、学校教育ならではの学びを大切にしながら教育活動を進めていきたいと思っています。



知り、何かできないかと考える児童もいました。

休校が明けてから、新型コロナウイルスについて考えたことについて話し合うと、医療従事者の皆さんは大変な状況の中で頑張ってくださいという発言がありました。教師がブルーライト運動や前もって取材した二つの病院の看護師さんの話を紹介したり、日本赤十字社が作成した「ウイルスの次にやってくるもの」の動画を紹介したりすると、医療従事者の皆さん



僕は、感謝の気持ちを伝える活動をして、「言葉」ってすごいなと思いました。僕たちはビデオレターと手紙を

福島市立福島第三小学校

六年 田中 侶那

の苦勞を自分事として捉えた子どもたちから「医療従事者の皆さんに、感謝の気持ちを伝えたい」という思いが生まれました。そこで感謝のメッセージを渡すこととなったのです。

子どもたちの作成したメッセージに対して、病院の方々からお手紙をいただき、この活動を通して、子どもたちは人の役に立ってたことを実感することができました。まさに J R C の「気づき、考え、実行する」とはこのことです。子どもたちの活動が社会に役

立ち、他の人の役に立てたのです。

その後、「学校でも感染症を防止するためのポスターを作ろう」「放送をして下級生に予防を呼びかけよう」と新たな行動にもつながっていました。

今回の活動を通して、子どもたちのもつ力が大人をも支えることができることが分かりました。今後も制限の多い生活が続くと考えられますが、自分にもできることを考える子どもたちが育成していきたいと思っています。



送っただけなのに、「とても励まされた」「泣きそうになった」と感謝の言葉を聞きました。

た。僕らのメッセージで、医療関係者の方々を励ますことができて、とてもうれしかったです。その時に、「言葉」

のすごさが分かりました。これからも新型コロナウイルスに負けず、医りようを頑張ってください。

コロナウイルスからの経験をSDGsに関連した教材に

須賀川市立白方小学校 教諭 鹿又 悟

四月七日に緊急事態宣言が国から出され、学校が臨時休業となったため、今年度の学校での本格的な教育活動は、約一カ月半遅れてのスタートとなった。臨時休業での経験を学習に生かすことはできないかと考え、全世界が経験している新型コロナウイルスを教材化し、学ぶ導入とした。

ウイルス「地域愛」「共生社会」をキーワードとしている。

経験を学びに変えることで、子どもたちの意欲は加速した。子どもたちの意見の中では、新型コロナウイルスの飲食店や医療関係についてのものが多かった。それと関連付けて、須賀川市で名産のきゅうりで何かしたいという児童の意見もあった。そこで、地域の特産「岩瀬きゅうり」を自らが育て、飲食店に買い取ってもらい、その売り上げを新型コロナウイルスで影響があった方々に寄付しようと計画している。児童一人一人が新型コロナウイルスの経験を



が新型コロナウイルスの経験を

から地域を見直し、地域貢献するために、外部講師・地域ボランティアを招聘した。また、きゅうりの支柱を建てたり、畑を耕したりする際に、児童の祖父母のボランティアを招き、一緒に作業を手伝っていただいた。次にきゅうり農家の方に、育てるポイント、どのような想いで栽培しているのかなどを教えていただいた。さらに、JAの方には、価格設定の方法や、需要と供給のバランスなど、きゅうり市場に関する内容を教えていただいた。児童同士の話し合いを基に、きゅうりの価格設定（一本三十二円）を行い、須賀川市飲食店組合へ買



い取っていただき、現在五店舗の飲食店でメニューの一部として、一般のお客様へ提供していただいている。また、飲食店に買い取っていただく際に、子どもたちの想いも伝わるようにポスターやステッカーを作成し、自分たちの想いを発信するようにした。

今回の新型コロナウイルスの影響に関する学習は、たくさんの方々との協力で授業が成り立っている。人々の繋がりは人生においても、大変重要なことである。今後は、たくさんの人に支えられて人々が生きていること、また皆が一員となって、支え合っていることに気づく学習にしていきたい。

技術と思いやりの先に

福島県立平工業高等学校 教諭 大木 健一

机の上にある新聞のスクラップには、満面の笑みを浮かべた生徒達が写っている。四月初、生徒達にこの笑顔はなかったと思う。

こうして筆を執っている今も、新型コロナウイルス感染症予防の観点からさまざまなボランティア活動が自粛もしくは中止になっている。差し伸べてあげたい手はあるのに、差し伸べる事ができない現状に私も生徒も、もどかしさを感じながら日々を過ごしていた。

学校は休校が続き、学習の進捗は大幅に遅れた。学校という学び舎で学習できないという環境を改善すべく、様々な

なアイデアを出し合った。

「図書館に衝立を置くのはどう？」ある生徒のアイデアだった。製品には工業高校生ならではのアイデアが随所に見られた。移動が簡単で組み立ても容易であり、角は安全を考えて丸く加工した。完成した製品はまず本校の図書館に設置した。

「中学校にも贈ってあげられない？」その流れは必然だったのかもしれない。市内の中学校に打診すると、是非お願いしたいという回答をいただいた。作業は急ピッチに進められ、三つの中学校に衝立を寄贈する運びとなった。衝立を中学校の生徒に手渡す

と、満面の笑みを浮かべて感謝の言葉が返ってくる。本校の生徒の顔にも笑顔が広がっていた。

「ありがとうつてニコツと笑ってくれる。その笑顔が、私には何よりの宝」これは、尾島春男さんの言葉である。彼を覚えていたのだろうか。災害ボランティアに積極的に参加し、スーパーボランティアと呼ばれる男性である。社会貢献活動はこうあるべきだという定義や信念を小職はもち合わせていない。ただ、生徒と共に多くの笑顔に出会い共に成長したいと心から思う。その小さな一歩を生徒の歩幅に合わせて今日も少しだけ前に進みたいと思う。



いのちを守る教育

過去に例を見ない自然災害が続く中、「自分のいのちは自分で守る」という視点での防災教育がコロナ禍においても各学校で行われています。東日本大震災を教訓として作成された「まもるいのち ひろめるぼうさい」、防災に関する知識、技術プラスコミュニケーション力がいざという時自分を守る。繰り返される悲劇を少しでも減らすために、コロナ禍でコミュニケーションワークシヨップは少し形を変え、三密を避けながら実施しています。



防災教室を実施して

伊達市立伊達東小学校 校長 緑上 隆

七月十五日(水)に、本校において青少年赤十字防災教育プログラム「まもるいのち ひろめるぼうさい」を活用した防災教室を開催しました。

講師として、日本赤十字社福島県支部の四名の指導講師においでいただきました。今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の心配があ



り、実施について慎重に検討いたしました。そこで、防災教育の重要性を改めて確認し、日本赤十字社福島県支部様のご理解をいただいて、三密にならないよう感染拡大防止対策をとりながら実施することとなりました。

防災教室の内容は、風水害の防災授業、非常食体験のハイゼックス炊飯、新聞スリッパの製作です。

風水害の防災授業では、どんな風水害があり、どのような対応をしなければならぬかを動画などを使って分かりやすく説明していただきました。

これまで実際に体験しながら学びました。

最後に、新聞紙を折るだけでできる新聞紙スリッパ作りを行いました。

子どもたちは、特に、袋の中でご飯を作ることができ、ことやスリッパが新聞紙だけで簡単にできることに驚き、感心していました。

自然災害が起きた時に、命を守るための行動ができるかどうかは、正しい知識をもっているかどうかということや、自ら考え判断する態度・能力を身に付けているかどうかに深く関係しているのではないかと考えます。

今回、このような防災学習をさせていただいたことは、子どもたち、そして我々教職

被災地の学校の責任

相馬市立磯部中学校 校長 本間 義和

東日本大震災からもうすぐ十年が過ぎようとしている。磯部地区は、松川浦の磯部漁港を中心に大洲、芹谷地、大浜地区が津波の被害を受け、現在はソーラーパネルの発電施設になっている。本校でも



員にも「貴重な学び」となりました。今回の学習を機に、さらに防災意識を高めるとともに、思考・判断力と行動力を育てていきたいと思えます。

ご指導・ご支援をいただいた方々に、心より感謝を申し上げます。

在籍生徒六名が津波の被害にあつて亡くなり、毎年三月十一日が近づくと同窓会の皆様と生徒、教職員が慰霊碑に花を手向ける。

そこで考えるのは被災地の学校の責任である。毎年、秋



の避難訓練には、中学生を中心に小学生や近くの井戸端長屋の皆さんと一緒に避難訓練を行い、炊き出し訓練が続いている。マンネリ化を防ぐために、豚汁からおにぎりを握る活動へ、そしてポリ袋調理（ご飯、カレー、肉じゃが、スパゲッティ、うどん）と進化した。昼の時間、大人は仕事で磯部地区にはほとんどいない。磯部にいるのは老人と子ども。中学生がしなければならぬ事はたくさんあると考えるからである。

そして継続しているのは、相馬市の防災教育専門員 高橋誠指導主事と本校の防災担当教員の「まもるいのち ひろめるぼうさい」の授業である。たくさん種類の準備されている指導案やワークシートを使い、全校生徒十八人が個人で、グループでそして全体で考えて発表し合つて授業を行う。「地震災害」ではいろいろな想定の場合での危険



や回避方法を考え発表しスキルを身につけていた。また「あなたの大切なもの」では、生徒が順位を説明する中で、その生徒の考えが順位の中に読み取れたりした。また竹ひごを組み合わせて高さを競う「竹ひごタワー」学習では、上級生も下級生も関係なく知恵を出し合い「どうしたら高く作れるだろう」と悩みながらコミュニケーションの大切さを学んでいた。中にはうまくいかない授業プログラムもあったが、逆にその理由を指導者側が考える事で次回の授業の参考になることもあった。

被災地の磯部中学校だからこそ自助・共助の精神を、ゆっくり丁寧に子どもたちに身に付けさせたい。

東日本大震災から十年

贈る人の気持ちを受けとめられる子供たちに

大熊町立熊町小学校 校長 阿部 裕美

大熊の小学校は、二〇一一年四月十六日に会津若松市の旧河東第三小学校を借用し、会津若松市の皆様の温かい御支援を受けながら開校することができました。震災前の大熊町は、熊町小学校と大野小学校の二校の小学校併せて約七百五十名の児童がおりました。緑化活動や読書活動に力を入れており、環境緑化では内閣総理大臣賞、読書活動では文部科学大臣賞を受賞するなどしてきました。PTA活動や音楽活動にも積極的に取り組んできました。

年々児童数の減少が続き、令和二年度現在で、児童数は九名です。少人数ですが、子どもたちは、笑顔を絶やさず努力を積み重ね、震災後も県主催のよい歯の表彰で三年連続優秀賞、全国図書館を使った調べる学習コンクールで優良賞や奨励賞を受賞、またペーパープログラミング全国大会に二度出場など成果も表

れております。今年度は、「できる人が、できるときに、できることをやればよい」の考えのもと、「やる気・勇気・元気」を合い言葉に教育活動に取り組んでいます。

本校のJRCの活動につきましては、年度当初に登録式を行い、年間を通じた環境緑化活動の推進に努めています。「大・熊フレンズ」という地域の皆様や小野友葵子様などの支援者の皆様と一緒に花の苗植えをしたり、感謝の気持ちをもち地域の美化活動に参加したり、赤い羽根募金活動に取り組んだりしています。

これらの有意義で豊かな体験ができるのも、会津若松市での温かい支援や全国各地からの支援により、励まされ、勇気づけられ、やる気を与えられたおかげで、現在にいたっているのを感じています。

ここで私事になり恐縮では

ありますが、私自身も震災等によりこれまで富岡第二中学校体育館や富岡高校川内校体育館、そして川内小学校体育館での避難生活、自分自身でいろいろ不動産巡りをし、六度のアパート契約、親戚宅やアパートへ十回の引っ越しなど、つらく悲しい体験をしてきました。その当時、日本赤十字様から冷蔵庫や洗濯機、電子レンジなど御支援をいただきましたことは、本当にありがたう感謝しています。

皆様からの温かい支援の話を聞くたび、あの信じられず忘れられない日からまもなく十年が経とうとしているにもかかわらず、いまだに支援をしてくださるのだろうかと思



令和2年度「防災教室」

	期 日	主催者	内 容	対象者	児童生徒	教員	合計(人)
1	7月15日(水)	伊達市立伊達東小学校	・非常食体験 ・防災授業「風水害」	全校生徒	88	9	97
2	7月20日(月)	あざみ野幼稚園・学童クラブ	・非常食体験 ・きけんはっけん	学童クラブ園児	12	3	15
3	7月21日(火)	あざみ野幼稚園	・きけんはっけん	園児(年長15人、年中15人)	30	0	30
4	8月28日(金)	白河市立五箇中学校	・非常食体験 ・防災授業「風水害」 ・救急法	全校生徒	30	8	38
5	9月4日(金)	相馬市立山上小学校	・非常食体験 ・いえまですごろく	5・6年生	12	1	13
6	9月8日(火)	福島市立東湯野小学校	・防災授業(いのちを守るための気づき)	全校生徒	16	3	19
7	9月9日(水) 9月10日(木)	いわき市立江名中学校	・BCW(竹ひご自分だったら) ・非常食体験・救急法 ・避難運営所ゲーム	3年生教員	41	5	46
8	9月11日(金)	石川町立沢田小学校	・非常食体験 ・災害時シミュレーション ・防災授業「風水害」	全校生徒	67	16	83
9	10月5日(月)	南会津町立館岩中学校	・非常食体験 ・防災講話「風水害」について ・BCW(竹ひごタワー)	全校生徒	30	13	43

う時があります。私たち以外にも災害が起きて困っている人達がいる中、継続して本校の支援活動に取り組まれている皆様方には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。確かに、現在も避難し、家族も離ればなれの状況が続く不便な生活を余儀なくしておりますが、最近の災害により困っている人がいる中、全国からの支援を引き続き受け入れても

よいのだろうかと考えてしまいます。継続して支援をする人達の思いや願い、気持ちをきちんと受け止められるのだろうか。と思わずにはいられません。私は校長として、皆様方の御支援を受け入れるにあたり、子どもたちが支援者の皆様の思いを十分理解し、感謝の気持ちを持ち続けられる子どもたちに成長して欲しいと願っています。

幼稚園の新加入

今年度新たに福島市内の六つの幼稚園が加盟し、県全体で十七園六百二十九名の園児が青少年赤十字のメンバーとして活動しています。加盟園に配付されている園児向けの防災教材「きけんはっけん」の積極的な活用にも期待がもたれます。また、今年度は実施できませんでした。青少年赤十字指導者講習会にも幼稚園から多くの指導者が参加できればと思います。泉崎幼稚園からは毎年参加していただき、小中高の参加者と情報交換や問題の共有を行っています。

つなぐとらいつて

泉崎村立泉崎幼稚園 教頭 佐川 哲子

本園は村で唯一の幼稚園であり、令和二年四月現在百四十一名の園児が、毎日元気に園生活を送っています。

標高四百八十四メートルの烏峠山、広々とした水田、良き折々の自然から豊かな保育教材をいただいています。

初めての青少年赤十字の加盟登録式は、平成二十一年五月十一日に行いました。日本赤十字社福島県支部の土屋悦男様から講話をいただき、子どもも赤十字の約束のもと、ボランティア活動をしています。

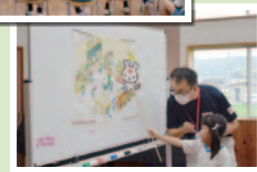
主に年少組は自分たちの道具箱の整理整頓、年中組は園

庭の石ひろいや草とり、年長組は運動会の用具出しなどを行っています。

一つです。様々な場面で気づき、考える、実行するが実践されています。今後も、泉崎幼稚園児たちが命、健康の大切さ、ボランティア活動の素晴らしさをつないでいってほしいと願いながら、笑顔いっぱいの活動をめざしていきます。

本来の赤十字の精神に届かない部分も遠からずあるかもしれません。今年度の登録式において、改めてアンリー・デユナンが命や健康を大切にする心を育てたことをわかりやすい言葉で園長から園児へ話が伝えられると、理解を示し日常生活において少しずつ小さな心づかい、ボランティア精神が見られるようになってきています。

こども赤十字は、幼児期の教育目標を達成させる活動の



福島県支部主催 国際交流事業

フィリピン派遣

福島県支部主催のフィリピン派遣は平成十八年度から今年で十回目を迎える予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で中止となりました。東日本大震災で中断はありましたが、平成二十八年と令和元年にはフィリピンメンバーの福島訪問も実現し、互いの理解や交流もさらに深まってきました。

この事業は東日本大震災の海外救援金で実施しており、来年度はこれまで実施してきた派遣事業の評価の期間とし、一旦中止することとなりました。

これまで九回の派遣で六十四名の生徒と十九名の顧問がフィリピンを訪れ、貴重な体験をする中で、自分自身の考え方や生き方に大きな影響を受けたとする報告がまとめられています。

今回はフィリピン派遣報告に代えて、平成十九年度第二回派遣団でフィリピンを訪問した酒井克幸さん(福島工業高等学校卒)に派遣の意義についてお話いただきました。

フィリピン派遣事業と

赤十字活動を振り返って

平成十九年度フィリピン派遣事業参加

福島青年赤十字奉仕団

(福島県立福島工業高校卒) 酒井 克幸

私がフィリピン派遣事業に参加したのは高校二年生の夏でした。前年参加された先輩方の発表を聞き、百聞は一見に如かず、私も自分の目でフィリピンの現状を知りたいという思いで参加しました。

フィリピンに行き現地の人々と交流して強く感じたのは、貧困など貧しいながらも前向きで明るく、皆が優しいということでした。当時、発展途上国と聞くと暗いイメージを勝手に抱いていました。しか



しフィリピンには、今の日本人が忘れていようような物質的な豊かさより、人としての心の豊かさを感じました。

また、フィリピン派遣の際、自由研究として私が当時高校で学んでいた専門知識を活かし、現地の水を持ち帰り水質を簡易分析しました。日本と比較すると綺麗な水とは言えなかったものの、環境問題に対する意識が強くなりました。この経験を忘れず、現在は工場の水質維持管理をする部門で働いており、当時フィリピンの水を測定した簡易測定器を使用する際は、時折フィリピンのことを思い出します。

フィリピン派遣では、かけがえない仲間との出会いもあり、社会人になった今でも

高校三年間活動を行ってきた J R C の経験を活かしたいとの想いで後輩達と「福島青年赤十字奉仕団」を立ち上げ、今年で十年を迎えます。現在、学生、社会人を含め約三十九名が所属しています。始めは、戦争や貧困について考えるコンサートを主催し、東日本大震災の際は、活動範囲が限られる中でおにぎりの

年に数回連絡を取り合い、食事会を開いて近況報告などお互いの健康を称えあっています。更には、歴代のフィリピン派遣に参加した O B ・ O G のメンバーとも連絡を取り合っています。将来は「福島フィリピン派遣の会」のような会を創設し、福島県の J R C、国際交流を活発化させる後押しができればと考えています。



令和2年度 救急法講習会

青少年赤十字の実践目標の一つに「健康・安全」があります。コロナ禍で救急法基礎講習や人工呼吸の特技はできないなどの制約はありますが、「いのちを守る」講習を多くの学校が受講しました。

(令和2年9月30日現在)

No.	講習期間	主 催 者	対 象	受講者数
救急法短期講習				
1	令和2年6月3日	郡山市立朝日が丘小学校	教職員	29
2	令和2年6月5日	郡山市立大島小学校	教職員	29
3	令和2年6月12日	郡山市立緑ヶ丘第一小学校	教職員	30
4	令和2年6月12日	白河市立白河第二小学校	保護者、教員	38
5	令和2年6月19日	いわき市立桶売中学校	生徒、教員	20
6	令和2年6月19日	会津若松市立一箕小学校	保護者、教員	23
7	令和2年7月3日	白河市立小田川小学校	保護者、教員	20
8	令和2年7月4日	猪苗代町立緑小学校	生徒、保護者、教員	44
9	令和2年7月6日	郡山市立行徳小学校	教職員	17
10	令和2年7月8日	三春町立中妻小学校	教職員	8
11	令和2年7月9日	川俣町立山木屋中学校	生徒、保護者	14
12	令和2年7月10日	天栄村立大里小学校	教職員	8
15	令和2年7月17日	福島市立鳥川小学校	教職員	19
19	令和2年7月22日	鏡石町立第二小学校	教職員	12
20	令和2年7月27日	学校法人尚志学園尚志高等学校	生徒	17
22	令和2年7月31日	福島県立平支援学校	生徒	5
24	令和2年8月4日	東西しらかわ支部養護教諭研究会東白川班	教職員	14
25	令和2年8月4日	白河市立白河中央中学校	教職員	18
26	令和2年8月24日	福島県立郡山支援学校	教職員	23
27	令和2年8月28日	白河市立五箇中学校	生徒	30
28	令和2年9月8日	富岡町立富岡第一・第二中学校 三春校	生徒、保護者、教員	20
31	令和2年9月26日	学校法人松韻学園福島高等学校	生徒	9
32	令和2年9月29日	福島県学校保健会岩瀬支部養護教諭部会	教職員	26
水上安全法短期講習 (着衣泳)				
13	令和2年7月15日	福島市立平石小学校	生徒	26
14	令和2年7月16日	棚倉町立棚倉小学校	生徒	187
16	令和2年7月20日	棚倉町立棚倉小学校	生徒	199
17	令和2年7月20日	南会津町立松沢小学校	生徒	49
18	令和2年7月21日	猪苗代町立吾妻小学校	生徒	72
21	令和2年7月30日	石川町立野木沢小学校	生徒	102
23	令和2年8月3日	福島市立福島第一小学校	生徒	84
29	令和2年9月18日	いわき市立長倉小学校	生徒	50
30	令和2年9月18日	富岡町立富岡小・中学校 富岡校	生徒	49

炊き出しボランティアに参加しました。その後は震災復興支援のサマーカーンプなど、被災された子供達を支援する活動にも参加しました。現在は、J R C 活動の補助や引き続き震災復興の支援、防災についての勉強会や災害が起きた際の募金活動など幅広く活動を行っています。

私が今まで活動してきた良かったことは、普段の学生、社会人生活では経験すること

のできない出会いや、活動ができたことです。そして一期一会から、かけがえない友人など多くの人と出会えたことは私の人生の財産です。これからも後輩達のサポートをしつつ、継続的に団の活動が続けられるようにしていきたいです。そして働きながらも自分でできることを行い、貴重な経験や出会いをさせていただいた赤十字の活動に少しでも恩返ししたいと思います。

あ と が き



総会やトレセン、指導者講習会、フィリピン派遣など新型コロナウイルスの影響で全ての行事が中止となり、この「J R C ふくしま」も発行が危ぶまれました。こんな時だからこそ目を向けたことをテーマに原稿をお寄せいただきました皆様へ感謝申し上げます。